

司馬遼太郎

竜馬がゆく

全八卷之八

龍馬

文藝春秋

楽

竜馬がゆく 八 (愛蔵版)

昭和五十七年 二月二十五日 第一刷

定価 二千三百円

著 者 司馬遼太郎

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話 東京 二六五一二二一

印刷 大日本印刷
製本 大日製本
製函 トーシキ

万一、落丁乱丁の場合はお取り替え致します

目 次

草雲雀

278

浦戸

233

朱欒の月

194

横笛丸

102

陸援隊

59

夕月夜

7

近江路

314

あとがき集

375

あとがき

一

377

あとがき

二

381

あとがき

三

383

あとがき

四

389

あとがき

五

395

題 装
字 幀
中 粟
田 屋
功 充

竜馬がゆく

八

夕月夜

竜馬は、船で、淀川をのぼった。

その三十石船のなかで陸奥^{むつ}が、

「所詮、後藤に名をなさしめるわけですね」といった。

陸奥陽之助のにらんだところ、後藤象二郎はこの巨案をおのれの方寸^{ほうすん}から出たものとして、口をぬぐって容堂に申しあげるにちがいない。土佐の上士気質からいえば、郷士の竜馬の名はぜったいに出すまいというのである。

「きつとそうですぜ」

と、陸奥はいった。

陸奥には、そんなところがある。そういう点に潔癖で小うるさくて、それがために狭量の印象をまぬがれない。

竜馬は、そんな陸奥の欠点をよく知っている。

「ひえっ」

と、奇声をあげて陸奥をみた。

「当然ではないか。かれは参政であり、容堂公の信任もあつい。この功名でいよいよ藩内で出世すればよいのだ」

「坂本さんはどうなりますか」

「ばかめ」

川波が立つほどの大声を出した。

「おれが、あのちっぽけな土佐藩で多少の地位を得たいと思っている、とおぬしゃ思うちるか」

「いや、それは」

「竜馬は、容堂公でさえ眼下に見くだして相手にしちやらんぞ。まして容堂公の乾分にすぎぬ後藤象二郎をや。かれがこの手柄で藩内の何様になろうと、竜馬の知ったことかい」

「えらい気焰だ」

と、横で文官の長岡謙吉が苦笑した。

「あたりまえよ」

竜馬はいった。

「おれのうまれは土佐藩の輕格のしかも冷飯育ちだが、考えちよることは、土佐藩ではない。日

本のことじゃ。日本のことが片づけば世界のことを考える」

「おそれ入った」

と、長岡謙吉が、くすくす笑った。

「そのくらいの気焰でいるから日々太平樂たいへいらくという面相でいられるわけですな」

「うん」

竜馬は、川岸の葦あしをながめながらうなずき、ふと、

「容堂公が二十四万石の親玉というても、その左右で多少出来るのは後藤象二郎か乾退助いぬいたいすけくらいのものじゃ。おれは天涯の浪人とはいえ、左右に陸奥陽之助、長岡謙吉を従えている。陸奥は一朝事が成れば一国の外交を主宰することができるし、長岡はゆうに一国の文教を主管することができる」

といった。

船はやがて伏見寺田屋の浜についた。

岸へあがり、薄暮の道路を横切って船宿寺田屋に入った。

「竜馬ぞ」

土間でどなった。

例の寺田屋の遭難以来のことである。

奥からお登勢がとび出してきて、竜馬の顔をみつめたままかまかまちに折り崩れた。

竜馬を泊める、ということはお登勢にとって覚悟の要ることだ。竜馬らを二階に案内したあと、階下に降りて店の者をあつめ、

「怪しい聞き込みが嗅ぎに來たら、すぐあたしに報らせるんだよ」と言いふくめた。

階上では陸奥陽之助が、

「坂本さん、古戦場ですな」

と、天井、床ノ間、次ノ間を見あげたり見まわしたりしてにやにや笑っている。

「おりょうさんは、どこから飛びこんできたんです」

「裏階段だよ」

「それをのぼって？」

「ふむ。のぼってその廊下を伝って部屋へ駆けこんできた。あとはよう覚えちゃらん」

「素っ裸だったそうですな」

と、まじめな長岡謙吉が、すこし声をひそめていった。

そこへお登勢があがってきた。茜染めの前垂れに、なにやら包んでいる様子だった。

「なんだ」

「手紙」

「ああ。いつも済まん」

竜馬は国もとに對して、

「自分への手紙は寺田屋氣付にしてくれ」

と申し送ってあった。

油紙につつんだ封書が、三通ある。どれもこれも乙女姉さんからだった。

「まるで情人のようだな」

と陸奥がからかいながら、長岡とともに隣室へ遠慮した。

披いてみると、どの手紙もとりとめがなく依然として愚痴が多い。

家で毎日ぶらぶらしているのが退屈だとか死にたいとか、いつそ国をとび出して京へのぼりたいとか、長崎でひろびろと暮らしてみたい、とかの類いである。要するに、竜馬のもとで暮らしたいというのだろう。

(こまったものだ)

竜馬はめずらしく暗い顔をした。乙女のこういう心境は、竜馬の日常のなかでの唯一の氣がかりのたねだった。

竜馬は乙女の氣持がわからぬでもない。乙女は夫の岡上新輔が氣に入らなくて勝手にいとまをとって実家の坂本家に帰った。女として不幸かもしれないが、じつは竜馬のみるところそれはさほどでもない。

乙女の不幸は、彼女が女芸以外のあらゆる才芸の能力をもつてうまれた、ということだろう。

学問もできるし、謡曲、浄瑠璃をやらせては素人の域を越えているし、それに剣術や馬術までできる。それだけでなくなにより男っぽい氣概があり、できれば天下国家のために奔走したいとい

うたちの女性だ。

(不幸だな)

と、竜馬はおもった。乙女の鬱屈が、であつた。それほどの自分をかかえて、いささかもその自分を行動で表現することなく、実家の奥の一室でむなしく歳月を消費しつづけてゆかねばならないのはよほどつらいことにちがいない。

(うまれぞこないなのだ)

竜馬はおもった。女が才能豊かに生まれつくということほど、不幸はあるまい。その表現の場が、この世にはないのである。

(いやだな)

と、竜馬は手紙をなげだして寝ころんだ。

……どうしてやることもできない。

少年のころ、すべての教養の基礎を竜馬は乙女からあたえられた。三つ上の乙女姉ほどすばらしい女はいないと竜馬は思いつづけていた。

長じてからも竜馬は、この姉が自慢だった。竜馬は同志と酒をのむと、よく乙女の話をした。このため竜馬の仲間では彼女は有名になり、

「竜馬より強い」

という評判が立っている旨、竜馬は冗談半分に書き送ってやったことがある。

(まったく、あの頃の乙女姉は英氣潑刺^{はつらつ}としていたなあ)

と竜馬はおもうのだ。それがここの二、三年、往年の乙女のようにではないのである。

(腐ってきた)

といつていい。自分の情熱を満足させる場がないために情熱が内攻して自家中毒をおこしはじめている、といつてもいいだろう。

以前にも、乙女のそういう自暴自棄に似た心境報告に対し、竜馬はからかい半分の諫^{べき}めの手紙を書いたことがある。

(また書かざるをえないか)

竜馬は起きあがつて女中をよび、筆と紙をそろえさせた。

「あなたにはこまる」

という趣旨の手紙である。

「御病氣がよくなりたれば、おまへ、さんもたこく(他国)に御出かけの御つもりよし」

と竜馬は書く。

「右ハ、私が論があります」

つまり乙女の故郷をとび出すについては異論がある、という意。

「今出てこられては、実に竜馬の名と言^いものはや諸国の人々しらぬものもなし。そのあね(姉)が、ふじゆう(不自由)をして出々来たと言^いては、天下の人にたいしてもはつ(恥)かしく、竜馬も此三四年前には人も知らぬ奴^{やつ}なればよろしく候得ども、今はどふもそふゆうわけにはまいら

ず」

そんなことを書きだした。

「もしおまへさん出かけたれば、どふしても見すてはおかれぬ。又せわ（世話）をせんならん」
竜馬は書きながら笑いだし、これでは可哀そうだと思いかえし、むしろ思いきって長崎へ連れ出してやろうと思い、——よしよし世話をする。長崎の留守は妻がひとりだからこの点こまっている。それをたすけてやってくれ。「いやでも乙様（おと）を近日私直々（じきじき）に蒸気船より御とも致し候」と最初の文章とはちがうことを書いた。

さらに乙女が、「短銃（ピストル）がほしい」といつてきたのに対し、「長崎の家にあることはある」と竜馬は言い、「長サ六寸計（ばかりど）五発込（はつこみ）、懐剣（わくけん）よりはちいさけれども、人をうつに五十間位（ごじゅうかん）あたりで打ち殺すことでき申し候。されど差しあげ申さず候」

そのわけは天下のことは短銃（ピストル）の一挺や二挺で定まるものではない。そんな料簡（りょうかん）でいるから出てきてもらうのはいやなのだ、とまたまた最初の文意にもどっている。要するにとりとめもない姉弟喧嘩（けんか）のようなものだ。

翌日、竜馬は京に入った。

京での足場は、相変らず藩邸（はんてい）を用いない。

「酢屋（すや）」

という屋号の商家である。ここは土佐藩邸（はんてい）出入りの材木屋で、竜馬はここをもって海援隊京都